

日だまりの郷



樋口むかし語り

まぐろ えんめいじそう

「万五郎の延命地蔵」

昔、京の公家の姫が、このあたりのお堂に住まっていました。佐久へ流される父に連れられ、父が途中で亡くなって、樋口の里で力尽きかかったところを坊さんに助けられたのです。姫はやがて子を産み幸せに過ごしていましたが、ある日、天竜川のほとりで子どもを見失ってしまいました。姫は「淵に棲む河童のしわざ」と悲嘆し、庵にこもって毎日経をとねえ続けましたが、とうとう大水と一緒に流されてしまいました。以来、墓から怪しい光が淵へ向かうさまを見た村人が哀れに思って地蔵を建てまつたところ、光はぴたりと止まったそうです。地蔵は、子ども思いの姫にあやかって、子どもの願いを何でもかなえると伝えられています。



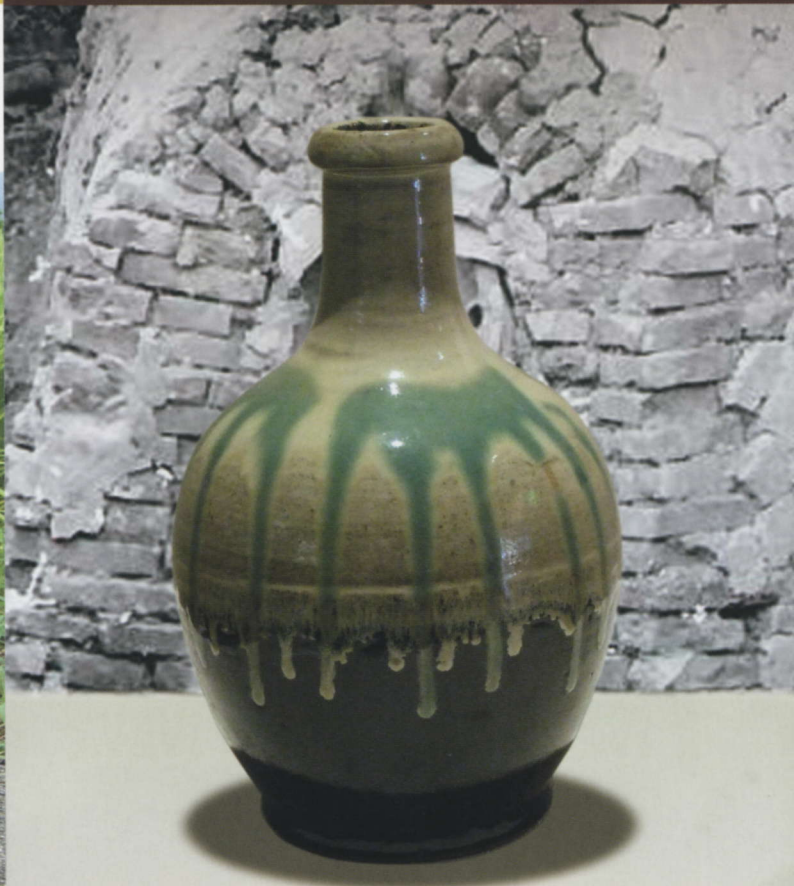
あしあとし

「足跡石」



昔、樋口の東の小高い山に、天狗が住んでいました。夜になると時々里におりてきて子どもや女の人をつかまえ、村人を困らせていました。ところがある日、人間がいろいろな道具を操って農作業をし、前日まで花一面だった田を青田に変える様子を見て、その力に肝をつぶし、山へ逃げ帰ったそうです。そのとき、あわてて飛び上がろうと踏みつけた大石に、右の足跡をつけてしまったような。

土と水の郷



赤羽むかし語り

「首なし地蔵」

真金寺へ通じる道沿いに、首が折れた石の観音像がありました。胴体を強くゆすると頭部が落ちるので、子どもたちは「首なし地蔵」と呼んで、学校の行き帰りにこの石像を蹴っては首を落とし、わるさをしていました。そのうち、いつしか頭部の行方がわからなくなり、本当に「首なし」の像となってしまいました。その後、近くの畑から頭部が発見され、無事に胴体とつながりましたが、地蔵と思いこんでいた当時のいたずら坊主たちは、観音様だったことにビックリしたそうです。



しんこんじ こうれんじ

「真金寺と香蓮寺」

真金寺の本堂は文政9年(1826)の山火事で焼失し、長年再興できませんでしたが、明治3年(1870)に廃寺となった樋口香蓮寺の本堂を買い上げ再建しました。現在は本堂のほか山門、鐘楼、庫裡などが整い、多くの仏像のほか地元出身の彫刻家瀬戸團治作の聖観音菩薩像もあります。



赤羽のみどころ

土と水の郷—赤羽

東部山麓からの扇状地と荒神山との間を抜ける街道沿いに集落が開け、荒神山団地に続き、東部の段丘上に上の原団地が造成され人口が急増しました。沢底川北の中山地籍には信州豊南短期大学があります。堤の築造や井筋の開削など水利に苦心し、昭和44年には荒神山に温水ため池「たつの海」が完成し、赤羽・樋口両区の水不足を補っています。幕末に始まった赤羽焼は、この地の養蚕、製糸業の隆盛とともに繁栄しました。

赤羽焼発祥の地碑 (あかはねやきはっしょうのちひ)

慶応元年(1865)に赤羽の小松五右衛門と北小河内(現箕輪町)の小島盛右衛門が、洗馬焼(塩尻市)の職工頭の援助を受け創窯し、90年近く続きました。最盛期には東の窯、西の窯など6つの窯があり、すり鉢、火鉢などの日用陶器、大正～昭和期には線糸鍋を主に生産しました。碑は、最初に窯を築いた南久保の小松家の裏庭にあります。

榎下玄通碑 (えのもとげんつうひ)

榎下は江戸中期の高遠藩医師で、元禄13年(1700)に藩医を辞し、この地に医業と塾を開きました。子どもには習字や読書、青年には古文、四書五経、大人には俳諧と、村人の教育にあたりました。碑は赤羽墓地の中にあります。兄は俳人宝井其角。

八嶋公園 (やしまこうえん)

昭和40年代中央道建設に伴い八島神社が東へ移転すると、切り通しをはさんだ北側の高台に宅地向きの平な一角が出現しました。ある開発業者が宅地造成を計画したものの地元には反対意見も多く、地元有志の対案が実現し、住民の憩いの場として私設「八嶋公園」が誕生しました。赤羽首領の碑もあり、区民に親しまれています。



ホタルの発生

辰野の名物「ホタル」は、ここ赤羽でも観ることができます。発生時期になると川辺にポツと優しい光が浮かびます。清らかな水辺にしか生息しないホタルの発生は赤羽の自然の豊かさを物語っています。

町民自慢の桜とため池—荒神山公園

古くは甲斐(山梨)の戦国武将武田信玄が、伊那谷攻めの際に砦を築き、合戦の前衛基地としたと伝わります。現在はスポーツ、レジャー、湯治にとさまざまに楽しめる観光名所で、園内には各種運動施設、ホテル、温泉施設、美術館、昆虫博物館などがあり、年間を通して多くの人々が訪れにぎわっています。また近年は、「全国ため池100選」に選ばれた「たつの海」周辺でウォーキングを楽しむ人々も増えています。園内にある800本近い桜が春を装い、秋はモミジが山を染める風景は町の人たちの自慢。冬にはイルミネーションの光が夜を彩り、新たな名物に加わりました。

樋口のみどころ

日だまりの郷—樋口

東部山麓の段丘上に樋口・山際が、荒神山の西南麓、天竜川沿いの段丘に万五郎・下田の各集落があり、区内を南北に中央自動車道が貫きます。いくつもの井筋が引かれて米作りが盛んとなり、美田が広がっています。天竜川越しに木曽山脈駒ヶ岳を望む壮麗な風景は、地元出身画家、中川紀元の格好のモチーフとなりました。縄文、弥生の各遺跡や平安末期の樋口氏居館跡、荒神社などが歴史の古さを伝えています。

樋口次郎兼光の墓 (ひくちじろうかねみつのはか)

平安時代末期の武将・木曾義仲の四天王の一人と言われた中原兼光は、樋口の一帯を支配し、樋口次郎兼光と称しました。寿永3年(1184)、朝敵として義仲が討たれ、兼光も35歳で悲運の最期をとげました。もと香蓮寺があった近くに、兼光の墓があったと伝えられています。



山際の八幡社 (やまぎわのはちまんしゃ)

山際耕地の人たちから「八幡様」と親しみを込めて尊崇され、毎年祭典が行われています。八幡社は「上伊那十三騎」の人びとが、武運長久、子孫繁栄、息災延命、如意満足などを願って勧請し、造営しました。寛永4年(1627)に社を創建した際の棟札(町文化財)も現存します。八幡神は「菅田別尊(ほんだわけのみこと)」で応神天皇のことです。

※現辰野地域にいた13人の武将

東天竜 (ひがしてんりゅう)

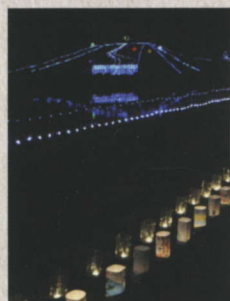
辰野町と岡谷市との境付近で天竜川の水を取り入れ、竜東地域の古くからの井筋や堰をつないで一続きの用水路として完成。安政3年(1856)に、赤羽の柳下で分水して東樋口へ通水するなど新たな井筋も造っています。昭和初期に完成した西天竜用水路に対して、東天竜と呼ぶようになりました。

樋口の米

北に荒神山を背負った南向きの地形と、天竜川が運んだ砂まじりの土壌とが、町内屈指のうまい米を産出。はるか2000年前の弥生時代の五反田遺跡集落跡からは、焼けた米が出土しています。



季節のみどころ



冬の蜷

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
		天神様 万五郎の散珠廻し 荒神山温泉春まつり	福寿草	桜	つつじ・さつき	蜷 紫陽花	どんぶや	八島神社例大祭 荒神社例大祭	もみじ		
どんぶや	八島神社祈年祭(簡弼神事)	荒神山冬の蜷									



荒神山のもみじ

日だまりの郷

歩行時間 1時間20分 歩行距離 約5km

1 まぐろ えんめいじそう
万五郎の延命地蔵

5分

2 はちおうじ 神 社

5分

3 つるかめ 鶴亀の道祖神

10分

4 下田の天神様

15分

5 やまぎわ 山際の八幡社

15分

6 じょうぜん 寺
常千鹿頭神社

10分

7 ひぐちじろうかねみつ 樋口次郎兼光の墓

15分

8 こうじん 神 社
荒神社

5分

9 美術館3階からの眺望

荒神社(こうじんじゃ)



鎌倉時代に創建され、戦国時代にはこの地の地侍樋口氏が守護神とした神社です。香蓮寺の鰐口や、樋口氏使用の櫓など貴重な文化財が伝存します。社叢は約1ヘクタールあり、樹齢200年を超えるモミ、スギ、ヒノキなどの巨樹が繁ります。その根本にはチゴユリ、シラネセンキュウ、ヤマジノホトギスなど草木が豊かに広がり、荒神山公園開発前の原始的な植生が見られます。杉の大樹が立ち並ぶ参道は地域の人自慢の癒しスポットです。

千鹿頭神社(ちかとじんじゃ)

大昔、矢沢原には鹿がたくさんいて、諏訪の明神様が鹿狩に訪れ、現在のお宮のある場所で料理し、頭を埋めました。その場所に建御名方をまつり、千鹿頭明神と称したと言い伝えがあります。樋口耕地の鎮守神をまつり、村人に尊崇、護持されています。



ぶらり 遊楽里 歩楽里

いいところ発見 みくちさ マップ





赤羽コース

土と水の郷

歩行時間 1時間10分 歩行距離 約4km

1 赤羽焼窯跡

10分

2 や八嶋公園

10分

3 や八嶋神社

5分

4 りん陶社

15分

5 しんこんじ 真金寺の三十三所観音

10分

6 赤羽の石造物群

5分

7 やな柳下分水

20分

8 短大からの眺望

八嶋神社(やしまじんじや)



赤羽と沢底の境の八幡坂にあった八幡社と、赤羽の農協支所近くの森にあった津島神社とを合わせて明治41年、荒神山に移しました。名前は両社から一字ずつを取りました。昭和49年、中央道造成工事に伴い現在地に移転。新年の農作物の出来や世相を占い、1年の安寧を祈願する「御筒粥神事」(2月初旬)が有名。豊作を祝う秋まつりには地元の子どもたちが笠踊りを奉納します。

林陶社(りんとうしゃ)

大正13年、高遠出身の林芳人は林陶社を興し、繰糸用改良鍋を発明。土製のこの鍋は安価の上、良質で辰野、岡谷をはじめ全国の製糸業者から注文が殺到しました。最盛期には11段の登り窯で50人の職人がフル生産しました。昭和に入って需要が減り昭和27年に閉窯。現存するのは社屋で、昭和初期の建築の粋をみることができます。窯の一部は荒神山公園の一角に復元されており、赤羽焼の製品は辰野美術館で展示しています。



見どころポイント

ホタルポイント

サクラポイント

紅葉ポイント

ツツジポイント

ビューポイント

古式ケ城